

研究課題：糖尿病・肥満患者における口腔に関する多施設疫学研究

研究者名：¹⁾和泉雄一 ¹⁾片桐さやか

所属：¹⁾東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野

²⁾東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 歯科医療行動科学分野

³⁾北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系 歯周歯内治療学分野

⁴⁾東京医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科

⁵⁾桐生大学 医療保健学部

研究協力者：²⁾新田浩、³⁾長澤敏行、⁴⁾金澤真雄、⁵⁾井上修二

(目的)

肥満者ではまとめ食い、早食い、食嗜好の偏りなどの行動の異常が認められることが多い。このような異常が肥満者の咀嚼機能にどのような影響を与えるか興味深い、その情報は非常に少ない。最近、肥満者には歯周病の罹患率が高いことが報告されているが、その成績は必ずしも一致していない。また、糖尿病患者における歯周組織の状態の調査は多数報告されているが、日本人における疫学調査は少なく、直接的に咀嚼能力を評価した報告は存在しない。本研究は、糖尿病、肥満と咀嚼機能、歯周病との関連について口腔病態の観点から検討することを目的とした。

(対象および方法)

日本肥満学会の肥満判定基準 BMI25 以上の肥満者で生活習慣病、免疫疾患などの全身疾患をもたない者を肥満者 (228 人)、日本糖尿病学会の糖尿病診断基準に沿って糖尿病と診断された者を糖尿病患者 (621 人)、受診者で特に異常を認めない者あるいは健康診断で異常の指摘がない者を健常者 (168 人) とした。被験者の年齢、性別、Body Mass Index (BMI)、チューインガムを用いて測定した咀嚼能力、歯周病の程度を示す口腔内 CPI コード、現在歯数、う蝕未処置歯数 (Decayed teeth)、喪失歯数 (Missing teeth)、処置歯数 (Filling teeth) (DMF 歯数) を調査した。

(結果と考察)

肥満では咀嚼能力低下と高率な歯周炎罹患が認められた。また、多重ロジスティック回帰分析によって肥満と咀嚼能力の低下が関係している可能性が示唆された。糖尿病患者においては、咀嚼能力が低下するほど HbA1c が高い、負の相関関係が認められた。肥満・糖尿病患者における咀嚼機能の低下の原因および咀嚼機能の全身の健康に及ぼすメカニズムについて今後さらに検討する必要があると思われる。